

平成 25 年度 施設一体型・分離型一貫校における調査の概要

I 教員アンケート

対象	区内の全一体型一貫校の教員 * あわせて一部の設問は、区内全施設分離型一貫校の教員にも調査を実施
実施時期	2014 年 1 月～2 月
	計 292 名
調査項目	・属性（職名、経験年数、担当校務分掌、担当部活動、担当委員会等） ・小中一貫教育による効果に対する意識 ・小中一貫教育に対する課題意識 ・在籍する中学校における一貫教育への取組等に対する評価 ・課題の改善策のあり方に対する意見 等

【一体型・分離型と傾向が異なる項目について抜粋】

項目	一体型	分離型
教員としての経験年数	「5～9年」が最も多い。	「25年以上」が最も多い。
休日出勤や平日の居残りについて、家庭の事情による制約がある。	35.9%	29.7%
平日の平均的な居残り時間	「4時間以上」が最も多い。	「約2時間」が最も多い。
最も居残りでも時間を費やしている作業内容	児童生徒の指導に関すること。	教材準備等の教科に関すること。
最も多忙感・負担感を感じている業務	学校行事	部活動・クラブ活動
校務分掌が負担になっている理由	不慣れであるから。	業務量が多いから。
学校独自の取組や研究で負担に感じているもの	小中合同行事の実施	市民科の実施
教育課程を「4・3・2」に分けることの影響	時間割の調整等が負担である。	4・3・2制を実践するのが困難である。
「市民科」の実施に当たっての課題	学校独自のカリキュラム構築が難しい、教科研究を行うのが負担である。	教科研究を行うのが負担である。
「小学校からの英語科」の実施にあたっての課題	特に課題はない。	小学校・中学校籍の教員で意識や考え方がちがう。
仕事上のコミュニケーションで良好な相手	同僚	担当校務の主任（部長）
一体型で担当する業務の量	業務量が増えたと感じている教員は 53.1%	
一体型で今まで以上に注力するようになった業務	学校運営に関すること	
学校での実践で最も効果をあげているもの	児童・生徒の基礎的・基本的学力の定着	児童・生徒の中1ギャップの解消
一体型の教員が現在の学校で感じていること	「現在の学校は、他の教職員に恵まれている（92.1%）」 「教員から管理職への相談等が行いやすい（90.7%）」 「調査業務が多く負担である（90.3%）」	

II 保護者アンケート

対象	区内の全分離型一貫校（中学校）の保護者 ※あわせて区内の全施設一体型一貫校の保護者にも調査を実施
実施時期	2014 年 1 月～2 月
回収結果	計 1,653 名（施設一体型の保護者は 2,100 名）
調査項目	・子どもの進路選択の状況、進路選択時の連携校、接続校に対する意識 ・子どもの中学校進学を考えた時点の小中一貫教育等に対する印象 ・現在、子どもが通っている中学校に対する印象、満足度 等

項目	一体型	分離型
小学校を選択時に、中学校との連携や接続を意識したか。	「ほとんど意識しなかった（32.1%）」 「あまり意識しなかった（26.2%）」 「強く意識した・やや意識した（26.4%）」	ほとんど意識しなかった（45.6%）」 「あまり意識しなかった（32.8%）」 「強く意識した・やや意識した（11.8%）」
中学選択の際、指定校以外を希望したか。	「希望申請しないで指定校に入学（70.4%）」 「希望申請して希望の学校に入学（27.4%）」	「希望申請しないで指定校に入学（60.0%）」 「希望申請して希望の学校に入学（37.7%）」
中学校を選んだ最も大きな理由	「地元で通学上の便利さ（37.9%）」 「連携校・接続校だから（26.0%）」	「地元で通学上の便利さ（45.9%）」 「友人関係（14.4%）」
指定校を選ばなかった最も大きな理由	「その他（22.2%）」 「友人関係（21.1%）」 「地元で通学上の便利さから（11.4%）」	「その他（24.3%）」 「友人関係（16.9%）」 「部活動（14.8%）」
現在の中学校に進学することを決めた時期	「6年生（54.3%）」 「5年生（11.4%）」 「小学校入学前（10.8%）」	「6年生（65.5%）」 「5年生（11.2%）」 「小学校入学前（6.3%）」
中学校選択の際、「連携校・接続校」を意識したか。	「ほとんど意識しなかった（32.0%）」 「あまり意識しなかった（39.6%）」 「強く意識した。やや意識した（35.5%）」	「ほとんど意識しなかった（39.6%）」 「あまり意識しなかった（31.1%）」 「強く意識した。やや意識した（24.9%）」
小中一貫教育への印象	「異学年の子どもたちの交流が盛んである（73.3%）」 「組織的な学校運営が行われている（60.3%）」 「スムーズに中学校生活に移行できる（60.3%）」	「スムーズに中学校生活に移行できる 55.1%）」 「組織的な学校運営が行われている（54.0%）」 「異学年の子どもたちの交流が盛んである（52.7%）」
連携校・接続校の中学校の印象	「異学年の子どもたちの交流が盛んである（62.3%）」 「組織的な学校運営が行われている（57.5%）」 「スムーズに中学校生活に移行できる（56.2%）」	「スムーズに中学校生活に移行できる 56.4%）」 「組織的な学校運営が行われている（52.5%）」 「異学年の子どもたちの交流が盛んである（44.8%）」
現在の中学校の印象	「組織的な学校運営が行われている（69.1%）」 「異学年の子どもたちの交流が盛んである（67.5%）」 「スムーズに中学校生活に移行できる（63.1%）」	「スムーズに中学校生活に移行できる 67.4%）」 「組織的な学校運営が行われている（69.4%）」 「よい生活習慣の定着が期待できる（65.1%）」
現在の学校に満足している	「そう思う・ややそう思う（70.9%）」	「そう思う・ややそう思う（83.4%）」

III 一体型管理職ヒアリング

対象	施設一体型小中一貫校の管理職および教務主任等
調査項目	① 組織編成、校務分掌の方針について ② 児童・生徒の指導、学校運営、外部対応等の各業務の状況や課題について ③ 施設一体型小中一貫校に特有の業務の有無と実態について ④ 校務改革に向けた取組の取組状況、改善状況 ⑤ 現在の教職員の状況

- ① 副校長・主幹の配置の工夫、小籍・中籍の同一分掌、若手・ベテランの同一分掌
・1名あたりの業務負担は少ない。
- ② 生活指導に多くの労力
・一貫校のカリキュラム開発に関する教員への負担
- ③ 時間割調整・施設調整に時間がかかる。
・開校年数が短い学校は行事の計画策定・実施・見直しで繁忙になる。
・学年数が多いことから日々、行事が並行、学校が落ち着かない、一般の教員が学校全体の状況を把握できない。
- ④ 会議における参加者の精選、事前準備、会議時間の工夫
・対面、会議、システム等の使い分けによる情報共有
・学年単位、校務分掌単位での協力体制の構築
- ⑤ 繁忙状況については、個人差。一概に一貫校であることが繁忙さに結び付いていない。
・若手教員の業務不慣れ、不安による長時間勤務の恒常化
・一部教員における学校改革への意欲の不十分

IV 分離型管理職ヒアリング

対象	品川区立荏原第六中学校、戸越台中学校、浜川中学校、京陽小学校の管理職及び教員
実施時期	2013 年 12 月～2014 年 1 月
調査項目	・連携校との一貫教育に関わる方針、組織体制、取組状況 ・児童生徒の指導、学校運営、外部対応、保護者対応等の各業務の状況、課題 ・施設分離型小中一貫校に特有の業務の有無と実態、課題 ・現在の教職員の状況（繁忙状況、意欲、取組状況） ・学校の特色化に向けた取組の方向性、要望 等

- 【小中一貫教育に関する課題】
- ・教員の異動が小中一貫教育の理念等の理解の妨げになる。
 - ・分離型では、出張授業や合同会議等の開催に制約がある。
 - ・中1校、小複数の連携は中に負担がある。
- 【学校選択と一貫教育の併用に関する課題】
- ・生徒指導の徹底やカリキュラムマネジメント等の小中一貫教育を行っても、友人関係や噂が学校選択の材料となっている。
 - ・学校選択のため、小中どちらも独自性を出さなくてはならず、連続性をもたせて連携することは難しい。
 - ・中学校では、生徒が複数校から集まってくるため、子どもによっては一から指導をスタートしなければならず、小中の指導の連続性が失われる。

大規模校

教員の意識

カリキュラム

課題

課題

特色ある教育活動

保護者の理解